12　次の文章は、平安後期の物語『夜の寝覚』の一節である。女君は、不本意にも男君（大納言）と一夜の契りを結んで懐妊したが、男君は女君の素性を誤解したまま、女君の姉（大納言の上）と結婚してしまった。その後、女君は出産し、妹が夫の子を生んだことを知った姉との間に深刻な溝が生じてしまう。いたたまれなくなった女君は、広沢の地（平安京の西で、嵐山にも近い）にする父入道のもとに身を寄せ、何とか連絡を取ろうとする男君をかたくなに拒絶し、ひっそりと暮らしている。以下を読んで、後の設問に答えよ。　　　〈東京大〉　二〇一五年度出題

さすがにの月は、夜くるままに澄みまさるを、めづらしく、つくづく見いだしたまひて、ながめいりたまふ。

　　アありしにもあらずうき世にすむ月の影こそ見しにかはらざりけれ

そのままに手ふれたまはざりけるのひきよせたまひて、かき鳴らしたまふに、所からあはれまさり、松風もいと吹きあはせたるに、そそのかされて、ものあはれにさるるままに、聞く人あらじと思せば心やすく、手のかぎりきたまひたるに、入道殿の、仏の御前におはしけるに、聞きたまひて、「あはれに、言ふにもあまる御琴のかな」と、うつくしきに、聞きあまりて、イ行ひさしてわたりたまひたれば、弾きやみたまひぬるを、「なほあそばせ。念仏しはべるに、『極楽の迎へちかきか』と、心ときめきせられて、たづねまうで来つるぞや」とて、少将にたまはせ、琴かき合はせなどしたまひて遊びたまふ程に、はかなく夜もあけぬ。かやうに心なぐさめつつ、あかし暮らしたまふ。

つねよりもあかしたるつとめて、大納言殿より、

　　ウつらけれど思ひやるかな山里ののしぐれのはいかにと

雪かき暮らしたる日、思ひいでなきふるさとの空さへ、とぢたる心地して、さすがに心ぼそければ、ちかくゐざりいでて、白き御どもあまた、エなかなかいろいろならむよりもをかしく、なつかしげに着なしたまひて、ながめ暮らしたまふ。ひととせ、かやうなりしに、大納言の上と端ちかくて、雪山つくらせて見しほどなど、思しいづるに、つねよりも落つる涙を、らうたげにひかくして、

　「思ひいではあらしの山になぐさまでオ雪ふるさとはなほぞこひしき

我をば、かくも思しいでじかし」と、しはかりごとにさへめがたきを、の君カいと心ぐるしく見たてまつりて、「くるしく、いままでながめさせたまふかな。御前に人々参りたまへ」など、キよろづ思ひいれず顔にもてなし、なぐさめたてまつる。

〔注〕○姨捨山─―俗世を離れた広沢の地を、月の名所である長野県の姨捨山にたとえた表現。「我が心なぐさめかねつや姨捨山に照る月を見て」（古今和歌集）を踏まえる。

　　　○そのままに─―久しく、そのままで。

　　　○少将─―女君の乳母の娘。

　　　○対の君─―女君の母親代わりの女性。

　問１　傍線部ア・イ・カを現代語訳せよ。

　問２　「つらけれど思ひやるかな」（傍線部ウ）を、必要な言葉を補って現代語訳せよ。

問３　「なかなかいろいろならむよりもをかしく」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。

◎問４　「雪ふるさとはなほぞこひしき」（傍線部オ）となるが、それはなぜか、説明せよ。

　問５　「よろづ思ひいれず顔にもてなし」（傍線部キ）とは対の君のどのような態度か、説明せよ。

# 【解答と採点基準】

問１　ア＝Ａ昔の頃とはＢ違って

Ａ＝５〔「以前」でも可。〕

Ｂ＝５〔「異なって」「うって変わって」などの表現でも可。〕

　　　イ＝Ａ勤行もＢ途中でやめて

Ａ＝５〔「仏道修行」でも可。〕

Ｂ＝５〔「そのままにして」などの表現も可。〕

　　　カ＝Ａたいそう気の毒にＢ見申し上げて

Ａ＝５〔「いたわしく」などの表現でも可。〕

Ｂ＝５〔「拝見して」でも可。〕

問２　Ａあなたは私に対して冷淡だけれど、Ｂ私はあなたを遠くから思っていますよ。

Ａ＝５〔「あなたは私に対して」という内容の補いがなければ０。〕

Ｂ＝５〔「私はあなたを」という内容の補いがなければ０。〕

問３　Ａ色とりどりの重ね着よりも白一色の方がＢ今日の雪景色には趣深いということ。

着物の色に関する対比的な説明がなければ全体０。

Ａ＝５〔「たくさんの色を重ねる」などの表現でも可。〕

Ｂ＝５〔「雪の日」あるいは「雪景色」の説明がなければ減点３。〕

問４　Ａ山里の生活になじめず、Ｂ京で姉と見た雪の情景を思い出し懐かしくなったから。

Ａ＝５〔「山里」は「嵐山」「広沢」などの地名でも可。〕

Ｂ＝５〔「京」または「都」と、「姉」のどちらもなければ０。〕

問５　Ａ女君の憂いを気にかけていないかのように、Ｂ努めてさりげなくふるまう態度。

態度の説明として「さりげなく」や「平然として」などの表現がなければ全体０。

Ａ＝５〔「心の中では女君のつらさは理解している」というニュアンスがなければ０。〕

Ｂ＝５〔「努めて」「何事につけても」「万事」などの表現がなければ減点２。〕

# 【現代語訳】

　そうはいうもののやはり姨捨山（にたとえられるほど俗世を離れたこの広沢の地）の月は、夜が更けるにつれて澄みまさっていくのを、（女君は）珍しくて、しみじみと眺めやりなさり、物思いに沈みなさる。

　問１ア昔の頃とは違ってつらいこの世に住む私だけれども、この空に澄む月の光は昔見た時に変わらない（美しさである）ことだったなあ。

　（久しく、）そのままで手をお触れなさらなかった筝の琴を（手もとに）お引き寄せになって、かき鳴らしなさると、場所がら趣深さはいちだんと優って、（人を待つという）松に吹く風もたいそう（その筝の琴の音色に）吹き合わせているので、（女君は）心誘われて、しみじみと感慨深く自然とお思いになるにまかせて、聞いている人もいないであろうとお思いになると気安くて、（持っている）技のすべてお弾きなさったところ、入道殿は、御仏の前にいらっしゃったが、（その筝の琴の音を）お聴きになって、「しみじみと趣深く、言葉にしても言い尽くせない御琴の音色であることよ」と、（その音色の）美しさに、じっと聞いていることもできなくなり、問１イ勤行も途中でやめてお渡りになると、（女君は）弾き止みなさったので、（入道殿は）「そのまま弾き続けなさい。念仏を唱えておりましたところ、（あなたの琴の音を聞いて）『極楽からの迎えが近づいたか』と、自然とわくわくして、（こちらを）訪ねて参上しましたことですよ」と言って、少将に和琴をお与えになり、琴を合奏するなどなさってお遊びになるうちに、あっけなく夜も明けてしまった。このように心を慰め慰めして、日をお過ごしなさる。

いつもよりも時雨が降り明かしたその翌朝、大納言殿から、

問２あなたは私に対して冷淡だけれど、私はあなたを遠くから思っていますよ。あなたのいる山里に夜中降り続ける時雨の音はどのように寂しいであろうかと。

　雪が降り続いて空が暗いまま暮れていった日、（楽しい）思い出のない都の家の空までも、（雪が）閉じてしまったような気がして、（女君は）やはり心細いので、（部屋の）端近くに座ったまま進み出て、白いお着物を何枚も、かえって色とりどりの重ね着よりも趣深く、魅力的に着こなしていらっしゃって、もの思いにふけり暮らしていらっしゃる。先年、このような（雪の降る）時に、（姉の）大納言の上と端近くに出て、（庭に）雪山を作らせて見た時のことなどを、お思い出しになると、いつもよりも溢れる涙を、かわいらしく拭い隠して、

「よい思い出はあるはずがない都だけれども、この嵐山の地でも心は慰まず、雪が降る都の家がやはり恋しいことだ。

（大納言の上は）私を、このようにはお思い出されないであろうよ」と、推測することまでも（涙を）とどめがたい様子を、対の君は問１カたいそう気の毒に見申し上げて、「心配するほどに、今まで物思いにふけっていらっしゃることですね。姫君の前に（女房の）方々は参上なさいませ」などと、万事（努めて）さりげない様子でお世話し、慰め申し上げる。